九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

【平成24年4月-12月授与分】博士学位論文内容の要旨及び審査の結果の要旨

https://hdl.handle.net/2324/26187

出版情報：2013-03-29. 九州大学
バージョン：
権利関係：

氏名・(本籍・国籍)	王（オウ）　慶（ケイ）（中国）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博甲第１６２号
学位授与の日付	平成24年5月31日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　人文科学府　言語・文学専攻
学位論文題目	**量化解釈と疑問解釈** **―集合と個体の関係に基づく統一的分析―**
論文調査委員	（主　査）准教授　上山　あゆみ （副　査）教　授　坂本　勉　　教　授　久保智之 教　授　髙山倫明

論　文　内　容　の　要　旨

実存世界は、無限の個体、および、個体と個体からなる集合で構成されている。集合は個体を含み、また、集合はそれ自体が個体となり更なる集合を構成しうる。そして、個体も集合も、何らかの形で事態に参与する。一方、言語表現は、実存世界を記述し、コミュニケーションに介在しうる記号の体系である。言語表現の中では、集合と個体は、常に顕然たる存在ではなく、「実（顕然）」である側面と「虚（隠然）」である側面とがある。

本論文では、名詞句が指示する集合を、そのメンバー同士の関係により AND 集合、WITH 集合、OR 集合という３つのタイプに区別する。そして、その集合のタイプによって、量化解釈（分配解釈、集団解釈、全称量化解釈、存在量化解釈）と疑問解釈が生まれるという分析を提案する。AND 集合とは、メンバーが並列等位関係でつながっている集合である。事態に参与しているのは、個体であり、これは、AND 集合に含まれるメンバーにあまねく当てはまるというところから、分配解釈や全称量化解釈が生じる。WITH 集合は、メンバーが主従非等位関係でつながっている集合であり、この場合は、AND 集合とは異なり、集団解釈が生じる。OR 集合は、包含的選言関係で成立している場合に存在量化解釈が可能となり、排他的選言関係で成立している場合に疑問解釈が可能になる。従来の形式意味論では、このような解釈の違いは、集合のタイプを区別しないまま、量化子(quantifier)の違いによって表現されてきた。これに対して、本論文では、これらの解釈の違いは、集合のタイプの違いとしてとらえたほうが、言語表現との対応がより体系的に一貫性を持って説明できることを示した。

本論文は、五つの章から構成されている。第一章では、問題提起を行った上で、本論文の理論背景を説明した。

第二章では、介詞もしくは連詞と呼ばれる he(和), huo(或), haishi(还是)などを取り上げ、それぞれ上記のどのタイプの集合を形づくるのか考察した。その結果、he(和)は、AND 集合を形成する場合と WITH 集合を形成する場合とがあるということ、それに対して、huo(或), haishi(还是)は、それぞれ OR 集合しか形成しないことを明らかにした。さらに、wulun(无论)という連詞は、排他的選言関係からなる OR 集合を AND 集合に変換する働きがあると仮定することによって、huo(或)と haishi(还是)の間の違いも説明できることを示した。そのほかにも、「结婚了（結婚した）」という述語と「夫妻（夫婦）」という複合語の違いを、集合の３つのタイプという観点からとらえなおし、そこから予測される結果が正しいことを示し、一般に複数を表すとされる men(们)や lian(连)といった接辞の機能についても述べた。

第三章では、分配解釈に特徴的にあらわれる mei(每)という要素に注目した。mei(每)は AND 集合としか結ばれないが、その構造に３種類のパターンがあるため、総称文、全称量化文、割り当て構文という異なる解釈が生じる。この mei(每)の働きと、３種類の集合のタイプとが相互に作用を及ぼし、さらに、それぞれの表現が生起する主語位置・目的語位置・主部位置の違いの結果、異なる解釈が生じることが

説明された。あわせて、個体量詞と集合量詞の違い、suoyou(所有)と mei(毎)の違い、「大家（みんな）」と「个个（それぞれ）」の比較も行った。

第四章では、特に不定語の解釈を考察した。中国語でも、日本語と同様、不定語は存在量化解釈、全称量化解釈、疑問解釈、複数疑問解釈という、いくつかの解釈を生じさせる。本論文では、その対応関係についても、集合のタイプという観点から分析した。不定語「谁」は、排他的選言関係もしくは包含的選言関係で結ばれる構成素からなるOR集合であるが、排他的選言関係からなる場合には疑問素性[QF]を付与されることがある。包含的選言関係で結ばれる場合、存在量化解釈が生まれ、存在を表す機能範疇 you(有)と共起可能になる。一方、排他的選言関係で結ばれている場合、wulun(无论)によって AND 集合に変換されると、全称量化解釈が可能になるが、疑問素性[QF]を付与されると、「特指问（疑問詞疑問文）」となる。これと同様に、「正反问（反復疑問文）」、「选择问（選択疑問文）」も排他的選言関係に基づくため、疑問素性[QF]の付与が可能となり、疑問文解釈が生まれる。「是非问（諾否疑問文」の場合は、中国語の疑問語気助詞「吗」が否定素性[Neg]を作り出す機能を持っており、この[Neg]との間に排他的選言関係が形成されるために、疑問素性[QF]の生起および疑問文解釈が可能になる。

第五章では、第二章から第四章までのまとめを行い、修飾関係の分析、中国語のスコープ解釈の一義性、多義性などの研究を今後の課題として提示した。

このように、集合のタイプの違いは、文法の様々な側面に影響を与えている。従来の形式意味論では、分配解釈、全称量化解釈、存在量化解釈それぞれに対して異なった量化子を仮定して説明する。量化子そのものは、集合を形成する機能は持たないため、he(和), huo(或), haishi(还是)などの違いは説明できない。men(们)や lian(连)についても同様である。さらに、suoyou(所有)と mei(毎)は、どちらも全称量化子で説明するしかないが、3.8 節で述べたように、この２つには様々な違いがある。量化子を中心とした理論では、これらの違いを述べる手段がないのである。逆に、不定語「谁」の場合は、存在量化解釈・全称量化解釈・疑問解釈を許すが、その事実は、単に異なるタイプの量化子と共起できると規定されるだけになり、なぜ、この３つの解釈に不定語が関わるのかということが説明できない。このように、量化子だけに頼って意味解釈の違いを記述するアプローチでは、語彙と解釈との対応関係を十分に体系化することができない。また、中国における言語研究の分野では、「語」本来の意味、さらに歴史をたどってきた語源が徹底的に追及されてきたが、そういった材料を統合し、論理的な分析により、語と語を結びつけ、文全体の意味解釈を体系づける理論に欠けていた。言うなれば、西洋の形式意味論は、「森を見て木を見ず」という状態であり、中国の伝統的な研究は「木を見て森を見ず」という状態だったことになる。集合と個体は、その両面が同時に言語表現に映し出されることはない。一方が「実」であれば他方は「虚」となる。しかし、集合と個体は表裏一体の存在であり、解釈においては、その「実」と「虚」の両面が必要不可欠である。本論文では、この集合と個体の関係を理論化することによって、「木」と「森」の両方を視野に入れ、論理学・中国語学・生成文法の間にある接点を模索した。「実」と「虚」という伝統的な中国哲学思想の概念は、理論言語学においてもまた深く根ざしているのである。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

上記の論文は、量化解釈と疑問解釈という、統語論で頻繁に取り上げられてきた問題に、まったく新しい観点からアプローチした意欲作である。

従来の研究においては、量化解釈というものは、述語論理学の量化子（quantifier）という概念に基づいてとらえられてきた。量化子とは、個体の集合に適用して、指定された条件を満たす個体の量を指定する働きを持った要素である。したがって、この考え方に基づくと、量化解釈を持つ文とは、何らかの集合の量を述べたものだということになる。これに対して本論文は、量化解釈を持つとされてきた文は、単に量を述べるものではなく、当該の集合の性質に関する陳述文であるととら

えなおした。まず、この点が従来の研究と大きく異なる点である。

これまでのアプローチでは、異なるタイプの量化解釈は、それぞれ、関わる量化子のタイプが異なっていると仮定することで説明されてきた。それに対して本論文では、集合そのもののタイプとして、AND 集合（独立的並立関係に基づく集合）・WITH 集合（協力関係に基づく集合）・IOR 集合（包含的選択関係に基づく集合）・EOR 集合（排他的選択関係に基づく集合）の４つの区別が提案され、量化解釈の違いは、これらの集合の組み合わせで説明された。本論文では中国語の様々な表現が取り上げられ、この４つのタイプの集合を仮定することによって、それぞれの解釈の違いが、より体系的に一貫性を持って説明できることが示されている。集合というものに上記の４つのタイプがあるという考え方は、認知的な観点から見ても不自然なものではない。これに対して量化子の場合は、認知的な存在物ではないため、その存在基盤を認知科学に求めることができない。その点でも、本論文の提案する言語理論には、言語を単に無機的な記号の体系としてではなく、人間の脳の中で実際に働くシステムとして追究しようとする王慶氏のアプローチが投影されている。

本論文では、疑問文とは何かという問いも掲げられた。中国語では、疑問を表す文末助詞が複数あるが、その生起条件は、文中にあらわれる名詞のタイプによって、複雑に定められている。本論文では、様々なタイプの疑問構文を精査した上で、大胆な記述的一般化が行なわれ、その結果、EOR 集合の関わり方が疑問構文の違いを導く根源となっていることを明らかにした。少数の仮定の相互作用によって、一見、非常に入り組んだ疑問構文の特徴を説明したのは見事である。

また、本論文では、「誰」「何」などの不定語が、なぜ、全称量化解釈・存在量化解釈・疑問解釈という大きく異なる解釈を持つのか、そして、なぜ、それぞれの解釈が特定の環境でしかあらわれないのか、という問題についても考察された。本論文は、不定語というものの本質を OR 集合を表すものであると考え、それが IOR 集合である場合に存在量化解釈が、EOR 集合である場合に疑問解釈と全称量化解釈が生まれるとしている。ここで、排他的選択関係にもとづく EOR 集合が全称量化解釈をも生みうるという点が極めて興味深い指摘である。英語や日本語においても、「whether one likes it or not」「好きでも嫌いでも」のように、互いに両立しない排他的選択関係を示すことによって「いかなる場合でも」という全称量化解釈を表すという現象がある。本論文の提案は、中国語以外の言語の研究に対しても、大きな刺激になるものであろう。

以上のように、本論文は、中国語構文論にとどまらず、ひろく、集合という概念の関わる文の構造と解釈について、様々な点で新しい提案を含む理論を構築しており、きわめて斬新で広範囲の影響をもちうる研究である。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分であることを認める。

氏名・(本籍・国籍)	おおぶち たかゆき 大 渕 貴 之（福岡県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	文博甲第１６３号
学位授与の日付	平成24年7月31日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　人文科学府　言語・文学専攻
学 位 論 文 題 目	**『藝文類聚』を中心とした唐代勅撰類書の研究**
論 文 調 査 委 員	（主　査）教　授　竹 村 則 行 （副　査）准教授　静 永　健　　教　授　柴 田　篤 准教授　南 澤 良 彦

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、唐王朝最初の勅撰類書である『藝文類聚』（武徳７年[624]成書）に研究の中心を据え、唐代勅撰類書が編纂当時において担った政治上の象徴的意義について、また王朝交代後における類書本文の変容について考察したものである。

『藝文類聚』は唐代類書のみならず、中国類書全体においても代表的地位を占め、今日においては中国学研究の工具書として頻繁に利用される重要典籍である。その一方で該書そのものに対する研究は、従来活発には行なわれていない。皇帝権力による類書編纂の意義に対する考察は、北宋の『太平御覧』や明の『永楽大典』等、他の王朝の勅撰類書を対象に行なわれ一定の成果を上げてきたが、『藝文類聚』を始めとした唐代勅撰類書の編纂意義やその政治的・社会的背景に対する解明は、いまだ十分に行なわれていない。また、唐代勅撰類書の本文については、研究の蓄積がほとんどなされておらず、類書の本文に問題点が存在すること自体が見過ごされてきた。このような研究情況に鑑み、本論文では、序論及び全６章における考察を行ない、唐代における勅撰類書編纂の意義と背景、及び従来知られることのなかった本文上の問題点を明らかにした。

始めに序論では、本論文が『藝文類聚』を中心とした『初学記』・『白氏六帖』の三種の唐代類書を主要な研究対象とすることを述べた。三種の類書は、いずれも宋代に出版がなされたが、この宋代に刊刻された三種の唐代類書を意味する「宋刊唐代三大類書」という枠組みが、明代に起源を持つと考えられる従来の「唐代四大類書」という枠組みに対して、より重要な意義を持つことを明示した。

続く第一章では、唐代類書が編纂当時において如何なる性質の書籍として編纂されたのか、編纂目的を考える上でも重要となる当時の「類書」概念について、『藝文類聚』及び『群書治要』を手がかりとして考察した。『群書治要』は、後世の目録分類によって『藝文類聚』等のいわゆる類書とは別の分類を与えられ、類書を考察する際の研究対象に含まれることがなかった。この後世の枠組みに拠ることなく、編纂当時の分類概念に基づいて『群書治要』をも含めた考察を行なう新しい手法によって、唐代初期においては、類書が雑家書として皇帝の群書要覧に提供された書籍であったことを明らかにした。

第二章では、前章に明らかにした当時の類書としては、やや趣を異にする特徴をも持つ『藝文類聚』について、その編纂過程を明らかにした。該書編纂当時の対外的情勢及

び朝廷内部における政治的動向を詳細に把握することにより、該書が政権を樹立した唐王朝の文治の象徴として、また朝廷内部においては、編纂を主導した皇太子配下の府僚群が従来にない新しい類書の完成によって皇太子に文徳の令名をもたらし、皇位継承を争う秦王李世民一派を牽制する目的で編纂されたものであったことを論じた。これにより、従来、他の王朝を例に解明されてきた皇帝権力による類書編纂の政治的効果、利用の実態がまた新たに解明され、中国勅撰類書史を考察する上でも重要な発見となった。

第三章は、従来、既存の文献の抄撮書である類書編纂では、十分に顧慮されることがなかったとされてきた編纂時における避諱処理について、『藝文類聚』以下の唐代勅撰類書に確実に行なわれていたこと、更に避諱の処理過程において、類書の部立て構成にまで多大な影響が及んでいたことを明らかにした。前章までの論述を踏まえ、類書が皇帝権力と密接に関係するものである以上、避諱が為されないはずはなく、現在目睹できる諸版本に見える唐諱は、みな王朝交代後の出版時において追改されたものであり、現在通行の本文が、宋代出版を経た本文であることを忽視してはならない点を明確にした。

この従来ほとんど指摘されることのなかった唐代類書に潜在する本文の問題点について、第四章では、『藝文類聚』内部における詩賦作品の配置原則を仮定、検証することによって、原則の例外として浮上する詩賦作品については、後世の補入、改編である可能性が極めて高いことを明らかにした。異本の校合では把握できなかった本文批判を可能とした点でも新しい研究である。

続く第五章、第六章においては、『初学記』を用いた『藝文類聚』本文の部分的補綴、あるいは『藝文類聚』・『初学記』を用いた『白氏六帖』の全面的な部立て増修が、王朝交代後における印刷を契機に行なわれたことを、各類書に収載される文献の詳細な対照調査により明らかにした。これらはいずれもほとんど知られることのなかった事実であり、「宋刊唐代三大類書」の間に潜在する本文移入という問題点を明確化したことは、本論文が初めてである。

以上、本論文は研究の蓄積に乏しかった唐代勅撰類書について、中心に据えるべき雑家書としての概念や、文治上の象徴的意義と政治権力による類書編纂の利用の実態、また宋代出版の三種の唐代勅撰類書間における本文移入について新たな知見を提出するものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、唐代最初の勅撰類書（百科事典）である『藝文類聚』を中心に、『初学記』『白氏六帖』を含む所謂「宋刊唐代三大類書」について、編纂の目的や過程と当時の政治背景、項目の分類概念や避諱処理、更に補綴と増修の問題等について考察したものである。

序論では、「唐代四大類書」のうち、写本で伝承した『北堂書鈔』を除く『藝文類聚』『初学記』『白氏六帖』について、新たに「宋刊唐代三大類書」という概念を提起する。

第一章「唐代勅撰類書の中核概念」では、本論文の中核をなす唐代「類書」の概念について、『藝文類聚』と『群書治要』を手掛かりに考察する。本論文によれば、当初の勅撰類書は後世の所謂一般工具書ではなく、皇帝の能率的な群書閲覧に供する為のものであった。

第二章「類書勅撰の政治的意義」では、皇太子李建成と秦王李世民（後の太宗）間の熾烈な皇位継承争いの中で、『藝文類聚』が欧陽詢主導下に成立した過程を克明に論述する。従来の研究の空白を解明した本論文の圧巻であり、原著論文は日本中国学会賞を受賞した。

第三章「唐代類書に見える避諱の影響」では、唐代に編纂され宋代に刊行された類書について、『藝文類聚』を中心に、編纂時における避諱や、それに伴う部立て改変の問題を論じる。続く第四章「『藝文類聚』本文批判の一指標」では、『藝文類聚』の詩賦作品の配置原則について検証し、原則の例外として載録される詩賦作品が、唐代編纂時ではなく、後世に補入改変された可能性が高いことを豊富な実例を以て論証する。これら『藝文類聚』本文の避諱や異同については本格的な先行研究に乏しく、本論文が新たな研究成果となる。

第五章「南宋出版時における『藝文類聚』の条文修補」、及び第六章「伝承過程における『白氏六帖』の部立て増修」では、『初学記』による『藝文類聚』の部分補綴、あるいは『藝文類聚』『初学記』による『白氏六帖』の全面的な部立て増修が、後蜀－北宋－南宋の王朝交代後における印刷出版時に行われたことを、各類書に収載される文献の詳細な対照調査によって明らかにする。これらの実証的な研究も従来無かった本論文の新たな成果である。

そして最後に、結論「宋刊本に潜む唐代類書本文上の問題点」では、政治権力と類書編纂、王朝交代と類書の改変、現行テキストの批判的活用と類書の原貌考究の必要性について、これまでの論述を踏まえ、総括して述べる。

今日我々は必要に応じて類書等の工具書を随時活用するが、工具書自体の意義や成立の背景等について文学史的関心を払うことは少ない。しかし類書もまた中国文学史上の貴重な成果であり、王朝交代に伴う政治権力の争闘の中で成立したものであることを、本論文は優れた着眼で実証的に解明した。従来の文学史研究上の空白に光を当て、多くの新たな研究成果を学界にもたらした功績は評価でき、今後の研究の更なる進展が期待される。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであることを認める。

氏名・(本籍・国籍)	森（もり）　誠子（さとこ）（福岡県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博甲第１６４号
学位授与の日付	平成24年12月31日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　人文科学府　言語・文学専攻
学位論文題目	**中世説話伝承考** **－女性説話を中心として－**
論文調査委員	（主　査）教　授　辛島正雄 （副　査）教　授　佐伯弘次　　准教授　青木博史 准教授　川平敏文 京都女子大学　教　授　坂本信道

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、中世に於いて平家に関わる言説がどのように形成され展開されていったのか、お伽草子と『平家物語』とを並べ本文分析を行うことでアプローチをするとともに、物語の伝承性についても、在地の説話・伝承を対象に考察を行い、その結果をまとめたものである。

第一部「お伽草子『祇王』の基礎的研究」では、お伽草子『祇王』（以下、『祇王』と略す）を用い、『平家物語』諸本の動きと、お伽草子を中心とした物語草子類との双方向からアプローチを行った。

従来の『平家物語』研究は、莫大な数の伝本の本文分析が中心であった。多様かつ複雑な本文を整理し諸本系統の解明を目指した『平家物語』の伝本研究は、特に作品の古態性をめぐる研究において格段の成果を挙げている。近年では、伝本の性格を踏まえた上で、作品として結実するまでの物語の創造性や原動力が、またその表出の場が注目されるようになっている。さらに『平家物語』と説話・お伽草子（室町物語）や、謡曲・舞の本・古浄瑠璃・説経といった中世芸能作品との影響関係、共通性、異質性などが考究されてきている。その一方『平家物語』研究の問題点として、本文比較の段階にとどまって、文芸としての把握が不足しているといった批判がある。だが、古典研究には基礎的な文献研究が欠かせないのであり、そのこと抜きに作品の正確な読解は期待できない。そのような成果に立って、『平家物語』の形成過程を把握し、その意義・特徴を文学史に位置付けるべきである。そのためには、上述のような研究動向の総合化、すなわち総合的研究が目指されるべきであり、そのための手始めとして第一部をまとめた。

具体的には、第一章では、軍記物語とお伽草子との関係について概観するとともに、『平家物語』に描かれる祇王説話（「祇王」の章段）について、『平家物語』の伝本によっては「祇王」の章段をもたないものもあるため、『平家物語』内部における「祇王」説話の位置について確認を行った。そして、『祇王』の研究史を概観した後に、公家日記などから読み取れる『祇王』の物語の享受について言及した。第二章では、八坂系『平家物語』に依拠した『祇王』の本文について考察を行った。八坂系『平家物語』に依拠した『祇王』の伝本には、岩瀬文庫蔵（元和寛永刊）古活字版絵入本一冊、慶應義塾大学図書館蔵奈良絵本二冊、京都大学文学部蔵奈良絵本一冊の三本があり、それらと八坂系『平家物語』とを比較した結果、八坂系第二類Ｂ種の本文の中でも一方系の影響を受けた同一の本文を基に作成されていることが明らかになった。さらに、岩瀬本、もしくは岩瀬本に近い本文をもったものを基とし、慶應本・京文本が製作されたことを推測した。第三章では、一方系『平家物語』に依拠した『祇王』について考察を行った。一方系『平家物語』に依拠した『祇王』の伝本には、堀江彦三郎氏所蔵奈良絵本二冊、ニューヨーク公共（ＮＰ）図書館スペンサーコ

レクション蔵絵巻二軸、京都大学附属図書館蔵奈良絵本二冊があり、それらと一方系『平家物語』とを比較した結果、『祇王』内部での本文異同の跡はなく、『祇王』の依拠した『平家物語』が個々に異なっていることを明らかにした。そして、従来本文の特徴が明らかになっていなかったＮＰ本について詳しく考察した。結果、ＮＰ本は覚一本を基軸としつつも、一部平仮名百二十句本の本文の影響も見られることがわかった。第四章では、徳田和夫氏が所蔵する『祇王・祇女物語』絵巻について考察を行った。徳田本は従来知られていなかった伝本であるが、本文を精査した結果、『源平盛衰記』に依拠して制作されたものであることがわかった。第五章では、弘前市立弘前図書館蔵『妓王』について、『お伽草子事典』（徳田和夫編、二〇〇二年、東京堂出版）では『祇王』の一伝本として紹介されているものの、弘前本は楠美則徳が寛政年間から文化年間に弘前に伝えた『平家吟譜』の流れを汲むものであり、譜が施される前の平曲譜本であることを明らかにした。

次に、第二部「伝承世界との交響」では、地域に根付いた平家伝承を中心に、郷土で親しまれている説話や伝承が、どのように享受され、新たな言説を盛り込みながら発展していったのかという問題に着目しながら考察を行った。

源平の争乱という日本中を巻き込んだ激動の歴史の記憶は、その後、物語や伝承・祭り・芸能など様々な文化を育み、さらに作品内部においても相互に乗り入れ、関わり合いながら、ダイナミックに作品として生成し享受されていった。そのため、その生成・変容・享受の実態、それを引き起こす人々や事象の動態などについて、そのメカニズムを解明することが必要となる。そこで、まず北部九州に地域を絞り、説話の生成と変容の過程を、それを育んできた土地の歴史文化（都市性・政治的背景・信仰・生活・経済…など）の実態を踏まえつつ、物語の伝承性について検証を行った。

第一章では、福岡県田川市に伝えられる小督説話について取り上げ、『平家物語』の「小督」の章段に描かれた物語が、『平家物語』からどのように抜け出し、一説話として享受されていったのか考察を行った。その結果、田川における小督説話は、成道寺にある七重石層塔と、平家の女官伝承とが結びついて語られるようになったなかで、宿場町を訪れた歌比丘尼たちなどの存在により、『平家物語』所収の小督局の話と結びつけられ、その往生譚としてこの田川の地で語られたと結論付けた。そして、『源平盛衰記』の流布により、現存する畧縁記が記され、それにより小督局の伝承が定着化していったとした。第二章では、北部九州に纏わる最澄の宇佐神宮参詣説話が、どのように変容し享受されていったのか、その様相の解明を目指した。その結果、最澄の宇佐神宮や香春神社への参詣説話が、宇佐での出来事なのか、香春での出来事なのか、在地に残る伝承ほど厳密に土地の区別をされず、関東の談義所などで利用されていたのではないかとした。さらに、最澄と宝塔とを結びつけた直談系説話に記される話とも結びつきながら、最澄の宇佐神宮参詣説話が、見宝塔品の教えを伝えるのによりふさわしい説話として作り変えられ、直談系の説話に利用されていったとした。第三章・第四章では、諸書に見える「濡れ衣」説話が、なぜ石堂川にある大きな石に結びついていったのか、在地の伝説形成に着目しつつ考察を行うとともに、在地に根付いた「濡れ衣」説話が、博多においてどのように変容し享受されてきたのか考察を行った。その結果、博多における「濡れ衣」説話は、貝原益軒が、「濡衣塚」と「博多七堂」、「太閤町割」など、それぞれを区別しシンプルな形で記したことで、その後の地誌類もそれを踏襲し定型化して記すが、しかし、一方では『石城志』や『博多之記』などの記述から、近世期の博多では、様々な言説が結びつき語られていたと結論付けた。そして近代に入り、益軒の影響が薄らいだためか、『石城志』の内容に、娘の名を「春姫」と名付けたものが好まれるようになる。そして、「博多七堂」や「石堂」という地名に関わる言説や由来と合わせて、石堂丸の出生譚や太閤町割までもが結びついていったことに言及した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中世を代表する文芸であり、多種多様な異本を発生させながら、広汎な享受の行われた『平家物語』をめぐり、そこから発生したお伽草子がどのようにして制作されたか具体的に検討するとともに、地方の伝承として定着してゆく過程について考察したものである。

第一部では、お伽草子『祇王』の現存諸本について、本文の特質を『平家物語』の諸本と逐一比較・対照することで明らかにする。「祇王」の物語は『平家物語』中の挿話として広く親しまれているが、諸本の中にはこれを欠くものもあり、後補された章段であると考えられる。その「祇王」の挿話を独立した一編の物語に仕立てたのがお伽草子『祇王』であり、現存諸本を詳しく検討した結果、八坂系『平家物語』に依拠した伝本として、岩瀬文庫蔵元和寛永刊古活字版絵入本一冊、慶應義塾大学図書館蔵奈良絵本二冊、京都大学文学部蔵奈良絵本一冊の三本を、一方系『平家物語』に依拠した伝本として、堀江彦三郎氏所蔵奈良絵本二冊、ニューヨーク公共図書館スペンサーコレクション蔵絵巻二軸、京都大学附属図書館蔵奈良絵本二冊の三本を確認した。以上は、いずれも語り本系の『平家物語』に依拠した伝本であるが、従来学界に未紹介であった徳田和夫氏所蔵『祇王・祇女物語』絵巻の本文についても検討したところ、読み本系の『源平盛衰記』に依拠して制作されたものであることが判明した。また、お伽草子『祇王』の一伝本とされてきた弘前市立弘前図書館蔵『妓王』一冊については、弘前藩に仕えた楠美則徳が寛政年間から文化年間に江戸から弘前に伝えた『平家吟譜』の流れを汲むものであり、譜が施される前の平曲譜本であることを明らかにした。

第二部では、まず福岡県田川市に伝わる小督局伝承について、『平家物語』の「小督」の章段に描かれた物語が、どのような経緯で田川の地に伝承されることとなったか考察し、成道寺境内にある七重石層塔と、都落ちした平家の女官の伝承とが結びついて語られるようになったなかで、宿場町を訪れた歌比丘尼などの存在により、『平家物語』の小督局の挿話と結びつけられ、その往生譚として田川の地で語られたと推論した。さらに、近世における『源平盛衰記』の流布により、成道寺に現存する『小督局畧縁記』が記され、伝承の定着を促したとする。ついで、同じく北部九州にまつわる伝承として、最澄の宇佐神宮参詣説話を取り上げ、関東での法華経談義所においては、土地柄についての厳密な区別は必要とされず、見宝塔品の教えを伝えるのにふさわしい説話に作り変えられ、寺院での談義に利用されたことを明らかにした。さらに、諸書に見える「濡れ衣」説話が、博多の地において、なぜ石堂川にある大きな石と結びついて伝承されるようになったのか考察し、それが貝原益軒によって編纂された『筑前国続風土記』に「濡衣塚」にまつわる伝承として記されたことによって定着するいっぽう、『石城志』や『博多之記』などの記述から、近世期の博多にはそれとは異なる多様な言説が存在したことも解明した。近代に入ると、益軒の影響力が薄らいだためか、娘の名を「春姫」とするものが好まれるようになり、「博多七堂」や「石堂」という地名に関わる言説や由来と合わせて、石堂丸の出生譚や太閤町割の伝承までもが結びついて、今日に到っていることを述べた。

第一部については、個別の検証に留まり、文学史的展望を十分に示し得ていない点の物足りなさ、第二部については、推測の根拠を示す資料の乏しさゆえ、一部立論に危うさのあることが指摘されたが、今後とも地道な文献調査を継続することで、新資料の発掘と、新知見を加えた文学史的研究の進展が期待される。

以上のような見地から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。